中村哲さんの切手

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.356
2021(令和3)年 2月16日(火)発行

●76年前の1945(昭和20)年2月16日は、東北初の米軍機による原町空襲の日。工場に動員されていた若者4人が犠牲になりました、○また、2019年12月4日73歳で銃撃死の中村哲医師が、このほど「丸腰の英雄」としてアフガニスタンで切手(縦5㌢、横4㌢)<上写真>になります。

東日本大震災から10年③ 被災民や被災地を励ます"歌や曲"

♫『花は咲く』 ♪真っ白な 雪道に 春風香る・・・

被災民や被災地支援のチャリティーソングとして、「NHK東日本大震災プロジェクト」の企画制作で2012年5月に発表された。作詞の映画監督岩井俊二氏も作曲の菅野よう子氏も共に仙台市出身で、東北ゆかりの芸能人たちに歌われた。東日本大震災の復興ソングとして定着しています。

♫『それでも、生きてゆく』 ♪悲しい事でも つらい事でも 報われる日がくる・・・

奇跡のピアニスト辻井伸行氏は被災者に諦めないでほしいの想いを込めて、2011年3月、アメリカツアーのアンコールで即興的に作曲演奏したピアノ曲です。さらに2012年秋、EXILE ATSUSHIに作詞を依頼し、辻井氏のピアノでATSUSHIが歌う。被災民を思いやる、あたたかく優しい歌で、涙が出ます。

♫『群青』 ♪あの日見た夕日 あの日見た花火 いつでも君がいたね・・・

2013年3月、小高区の平成24年度南相馬市立小高中学校卒業生のライブアルバムとして生まれた合唱曲。当時の1年生は2名が津波で犠牲になり、小高区は原発事故で警戒区域に指定されて104名のうち97名が全国に散り散りに避難した。学校の移転先の鹿島区に残った生徒はわずか6・7名で、合唱も歌えない状況に心を痛めた音楽教諭小田美樹先生は、全国各地の友人を思いやる生徒たちの言葉を集めて詞にして作曲。卒業式に歌われ、メディアに紹介され全国に広がっていきました。

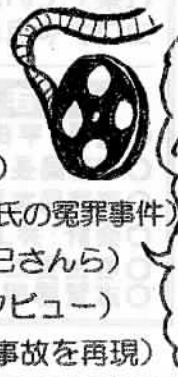
『群青』が生まれた南相馬市立小高中学校▲

♫その他、『上を向いて歩こう』『ジュピター』『ふるさと』など、たくさんありますね♪

東日本大震災から10年④ 大震災・原発事故の告発"映画"

○震災・原発事故後、約500本の関連映画が制作されたそうです。皆さんがお薦めの映画は?

1. 『相馬看花そうまかんか 奪われた土地の記憶』2011年・109分 監督:松林要樹(原町区江井では)
2. 『フタバから遠く離れて』12年・96分 監督:舩橋淳 (双葉町は埼玉県加須市へ移住し)
3. 『放射線を浴びた X年後』12年・83分 監督:伊東英朗(米国ビキニ水爆実験の真相は)
4. 『渡されたバトン さよなら原発』13年・120分 監督:池田博穂(『日本の青空』から3作目)
5. 『日本と原発(4年後)』14年・138分 監督:河合弘之弁護士 音楽:新垣隆
6. 『小さき声のカノン』14年・119分 監督:鎌仲ひとみ(被ばくから子どもを守る母は)
7. 『遺言 原発さえなければ』15年・225分 監督撮影:豊田直巳・野村雅也(自死した酪農家は)
8. 『飯舘村の母ちゃんたち 土とともに』16年・95分 監督撮影:古居みずえ
9. 『太陽の蓋(ふた)』16年・130分 監督:佐藤 太(3.11から5日間のドラマ)
10. 『奪われた村』16年・64分 監督:豊田直巳(飯舘村の避難5年目の記録)
11. 『新地町の漁師たち』16年・92分 監督:山田 徹(風評苦の漁師の記録)
12. 『「知事抹殺」の真実』16年・80分 監督:安孫子亘(福島県知事佐藤栄佐久氏の冤罪事件)
13. 『被ばく牛と生きる』17年・104分 監督:松原 保(希望の牧場吉沢正巳さんら)
14. 『福島は語る』18年・170分 監督:土井敏邦(悲惨な被災者14名のインタビュー)
15. 『Fukushima50(フクシマ50)』2020年・122分 監督:若松節朗(原発事故を再現)



追悼　作家・作詞家　なかにし礼さん（82歳）

昨年12月23日死去のなかにし礼さんは、旧満州生まれ。6歳で終戦を迎えるがソ連軍の侵攻で母や姉とともに逃げまどい、母国日本に見放され国家の酷薄さを痛感する。そんな過酷な戦争体験から平和主義に徹し、日本国憲法を「世界に誇れる芸術」と高く評価、メディアでも常に自分の生い立ちを話しながら、堂々と反戦平和を語っていました。

作詞訳詞は約4千曲。『恋のハレルヤ』は満州から引揚船に乗れる嬉しさを、『人形の家』は収容所生活のことなど、戦争体験から作詞したと話す。

オペラ歌手佐藤しのぶさんの強い想いから生まれた平和の歌『リメンバー』2013年は、なかにし礼作詞の地球規模のスケールの大きな世界平和の名曲です。皆さんのイチオシの歌は、『知りたくないの』、『舟歌』、やはり『石狩挽歌』ですか。

近現代史研究家・作家　半藤一利さん（90歳）

「私は護憲派だが、9条を守るのではなく育てていき、憲法は100年もたせたい」が持論でした。

「私は『絶対』という言葉は使いたくないが、ひとつだけ“戦争だけは絶対に行ってはいけない”と言いたい」

「元陸軍軍人瀬島龍三がうそをつくときの顔、私には分かる」などの名言を残し、1月12日半藤一利（はんどう・かずとし）さんが死去されました。

1945（昭和20）年3月10日の、14歳での東京大空襲の体験などを元に、分かり易く昭和史を書き、アジア太平洋戦争を無謀に推進した軍人たちの「無計画・自己過信・優柔不断・大和魂などの精神主義、責任を取らないこと」を批判。それは戦後政治、現在の政治家、福島原発事故も根っ子は同じです。

『日本のいちばん長い日』は映画化され、『昭和史』も読みやすい。

会員さんの短歌

○憲法九条を守る歌人の会発行の『歌集　憲法を詠む　第十二集』より○
二首とも本会会員吉田信雄さんの作品です

現憲法は押しつけにあらず　日本の学者ら練りに練りにしものぞ
（憲法学者鈴木安蔵氏ら）

憲法を変へていづこへ行かむとす　かの戦前へ回帰を目指すか

おすすめの一冊です

会員さんの新刊　松谷彰夫著　かもがわ出版　¥1800＋税

『裁かれなかった原発神話　福島第二原発訴訟の記録』

福島第一原発の36年前、その安全性に疑問を抱き、設置許可の取り消しを求めて国に挑んだ住民たちのこと。地裁、高裁、最高裁の司法は訴えを退けたが、3.11事故が住民の正しさを悲惨な形で立証した。著者は元原町高校社会科教諭、福島市在住の本会会員です。

（購入希望の方は、事務局山崎健一までご連絡ください）

≪事務局より≫

コロナで身動きできない毎日ですが、無為無策、無能力の菅首相や政権に腹を立て、呆れ果てています。「馬鹿な大将、敵より怖い」、コロナや鬼などより“人間”の方が怖いかも。

武力も核兵器もコロナの前では全く無力なことがよく分かります。コロナ収束後、人類は「国防力」より「国民の命を守ることや平和な日常が大事」と気づけばいいと思います。

「はらまち九条の会」事務局

○会長：平田慶肇　TEL(0244) 24-1211
○事務局長：早坂吉彦 TEL090-2975-2508
○事務局次長：山崎健一（福島市）TEL090-7527-5453　Eメール：yamazakiken1@gmail.com
○会計：井上由美　〒975-0031南相馬市原町区錦町1-43井上薬局内　TEL22-7511・FAX26-0892
○石田賢二（郡山市）TEL080-5556-4037　○番場恵子 TEL22-0715　○大浦祥見 TEL24-0704
○志賀勝明（相馬市）TEL090-9530-5524　○若松麟二 TEL23-5732　○田中徳雲（小高区）